



【フロウ】 Flow



福島県奥会津の暮らしに息づく伝統文化は、只見川・伊南川とその支流に集約される豊かな水の流れの中で育まれてきました。
Flowは、奥会津の宝である「豊かな自然・伝統文化・ここで生きる人」を、皆さんと見つけていく情報紙です。

奥会津を つなぐ人々

尾瀬の自然とそこに生きる人たちに魅了され、
福岡県から移住してきた小山抄子さん。
食害を防ぐために駆除される鹿の命を無駄にせず、
大切に使いたい。
彼女の想いに共感した人の輪が広がり、
新しいものづくりが生まれている。



Okuaizu news Flow

駆除・廃棄される尾瀬の鹿
その現実に抱いた疑問

青、白、ピンク、茶色……。カラフルな革はしなやかでやわらかく、手にしっくりと馴染む。心地よい風合いのこの革は鹿の皮をなめし、染色したもの。ここからポーチ、財布、スニーカーなどに形を変え、多くの人の暮らしを彩っている。「奥会津と北海道で捕獲された鹿の皮を猟師さんからいただいで使っています」。そう話すのは、南会津町の名木「古町の大イチョウ」近くに工房を構える小山抄子さんだ。

小山さんは福岡県出身。大好きな自然と動物の写真を撮りたくて1993年、尾瀬沼ビジターセンターでアルバイトをした。そこで出会った人たちの温かい人柄と尾瀬沼の周囲に広がる原生の森に魅了され、2006年から再び尾瀬で働き始めた。そしてある変化に気がつく。鹿が増え始めていたのだ。

「最初に尾瀬に来たときは鹿の姿を見ることはほとんどなく、遠くで鳴き声が聞こえるくらいでした。2006年にはすでに鹿が湿原に入り始めていて、それからどんどん増えていったんです」。ミツガシワやニッコウキスゲなど鹿が好んで食べる植物が激減し、2010年ごろから害獣として「駆除」が始まった。

駆除された鹿はすべて廃棄される。その現実を目の当たりにした小山さんは、「命をもらって抱いて捨てるのはなぜ？」と疑問を抱いたと振り返る。「命をもらうなら、その後にも責任を負うべきではないか。捨てるに使うことはできないかと思ったんです」。



Flow
雑記帳

<https://www.okuaizu100.jp/flow/>